

仲間との関わりを大切にしながら、進んで基本的な動きを身に付ける運動に親しみ、できる喜びや協力する楽しさを味わう愛顔あふれる子どもを育てる

愛媛県八幡浜市立神山小学校 二宮章紘

1 テーマ設定の理由

八幡浜市は、愛媛県の西端にある佐田岬半島の付け根に位置している。子どもたちは、温暖な気候の中で、生き生きと学習や運動に取り組んでいる。しかし、日々の身体活動量や体力は低下傾向にあり、体力の二極化も加速しつつある。このような状況において、本市は、体づくり運動領域の「多様な動きをつくる運動」に重点を置いて研究を進めている。

本領域は、他の領域において扱われにくい体の様々な動きを取り上げ、その行い方を知るとともに、運動の楽しさを味わいながら体の基本的な動きを培うことをねらいとしている。本市の課題である、基本的な動きを総合的に身に付けたり、体力を高めたりすることに期待を寄せることができる領域である。これまでの学習を振り返ると、多様な動きをつくる運動の学習では、持久走や縄跳びなどの指導を中心に展開することが多かったと感じている。そのため、多様な運動を経験させることや、話し合いを通して自己の体力の課題や成長を実感する場が不足しがちであった。

このような実態を踏まえ、領域テーマを「仲間との関わりを大切にしながら、進んで基本的な動きを身に付ける運動に親しみ、できる喜びや協力する楽しさを味わう、愛顔あふれる子どもを育てる」と設定した。ゴールデンエイジとされる中学年を対象に、仲間との豊かなつながりの中で、できる喜びや協力する楽しさを味わう愛顔あふれる子どもを育てていきたいと考えた。

2 研究の視点

(1) 教材とつながる

誰にとっても「やさしい運動」となるように教材を工夫し、「分かる」「できる」喜びや運動のもつ本質的な面白さを味わわせることができれば、進んで運動に親しもうとする愛顔あふれる子どもが育つだろう。

(2) 仲間とつながる

仲間とつながる場の充実を図ることができれば、進んで仲間と関わり、仲間と一緒に課題を解決していこうとする愛顔あふれる子どもが育つだろう。

(3) 自分とつながる

自分自身の学びの成果や課題を振り返る場を整えたり、仲間と協力して活動やルールを工夫したりする面白さを味わわせたりすることができれば、自信をもって多様な運動に挑戦していこうとする愛顔あふれる子どもが育つだろう。

3 研究の実際

(1) 教材とつながる

ア 単元構想の工夫

多様な動きに親しませることと、動きの質が高まる喜びを味わわせることができるように単元を

構想した（資料1）。毎時前半は、低学年で扱った易しい動きの運動や、多様な運動に親しませることを重視し、後半は、単元を通して行うリレー形式の運動を重視した。5つの運動に継続的に取り組み、練習を重ねていくことで、動きの質が高まっていくことを実感していた。

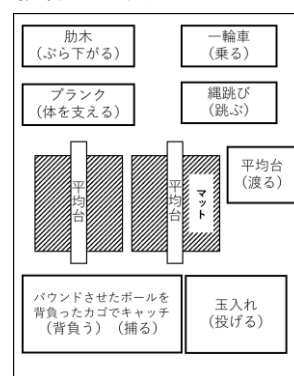
時	第1時	第2・3時	第4時	第5時	第6時
はじめ	<ul style="list-style-type: none"> ○ オリエンテーション <ul style="list-style-type: none"> ・ 単元のめあて ・ 学習の進め方 ・ 試しの運動 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 準備運動 ・ 用具の準備 ○ 多様な動きに親しむ活動 			
なか		<ul style="list-style-type: none"> ○ ルール確認 ○ リレー競技 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 仲間とつながるリレー競技 ①しまわたり ②じゃんけん手押し車 ③バランス棒運び ④バウンド&キャッチ ⑤ボール渡しリレー 		
おわり		<ul style="list-style-type: none"> ○ 振り返りタイム <ul style="list-style-type: none"> ・ 動きやポイントの振り返り ・ ルールの確認・変更 			<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元の振り返り・まとめ

資料1 単元構想

イ みんな「が」楽しい、みんな「で」楽しいと思える共生の視点に立った教材の工夫

前述した、多様な動きに親しむ活動では、3～4人の小グループで、様々な運動を体験できるコーナーを設定し、場づくりを工夫した（資料2）。1単位時間ごとに内容を変更することで、体のバランスをとる運動、体を移動する運動、用具を操作する運動、力試しの運動、そしてそれらを組み合わせる運動を満遍なく学習できるようにした。

また、リレー競技（資料3）においては、子どもたちから出てきた意見を積極的に取り入れ、人数や使う用具などの条件を変えられるようにした。すると、柔軟にルールを変更し、みんな「が」楽しい、みんな「で」楽しい運動となるように工夫する姿が見られた。



資料2 場づくりの工夫

リレー形式で行った運動	基本のルール	運動の様子
① しまわたり 跳び箱の最上段で作った経路を跳んで、移動する運動。	チーム全員で行う。跳び箱で経路を作り、8m先に設置したコーンを折り返して戻ってくる。跳び箱上にしか着地できず、外に足が着いたらその地点からやり直す。	
② じゃんけん手押し車 腕で自分の体重を支えながら移動したり、相手の様子を見ながら支えたりする運動。	二人組で行い、8m先に設置したコーンでじゃんけんをし、勝ったら戻ってくる。負けた場合は、別のペアが再挑戦する。しんどくなったら、途中で役を交代することができる。	
③ バランス棒運び 手のひらに棒を立てた状態で、バランスを取りながら平均台の上を渡る運動。	チームの代表二人が行う。手のひらで、棒を支えて平均台の上を渡る。棒を落としたり、平均台から落ちたりしたらその場からやり直す。	
④ バウンド&キャッチ 床にバウンドさせたボールを、背中に背負ったかごでキャッチする運動。	チームの代表二人が行う。床にバウンドさせたボールを、背中に背負ったかごでキャッチする。	
⑤ ボール渡しリレー 一列に並んで、バケツリレーのように全員でボールを運んでいく運動。	チーム全員で行う。8m先に設置したコーンを折り返して戻ってくる。行きは頭の上を越すようにしてボールを渡し、帰りは股の下を通すようにしてボールを渡す。	

資料3 リレー競技の内容

(2) 仲間とつながる

ア 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

個別最適な学びの実現のために、自分の成長や課題が視覚化できるようなワークシートを作成した（資料4）。

ペアやグループで運動の様子を確認し合って、達成できたらサイ

ンをもらうようにした。身に付けた運動技能が分かるようになることで、「新しい動きを身に付けよう。」という思いで運動に親しむ児童が増えていった。

また、協働的な学びの充実に向けて、リレー形式の運動の内容を工夫した。全て二人以上で行う競技内容にしたため、対話を重ねなければ呼吸が合わず、うまくいかない運動を取り入れた。そのため、教師が「作戦を立てましょう。」や、「互いにアドバイスしましょう。」などの、声掛けをしなくても自然に対話が生まれ、試行錯誤しながら活動する姿が見られた。

イ よりよい仲間との関わりを実現するための支持的風土の醸成

温かな雰囲気の中で意欲的に運動に取り組ませたいと考え、学習環境づくりにも力を入れた。運動中に言われたらうれしい言葉を考えさせ、掲示物を作成した。運動の最中には、子どもたちが考えた温かな声掛けが響き、失敗しても前向きな気持ちで過ごすことのできる子どもが増えてきた。情緒面のアドバイスが増えた一方で、技能面に関するアドバイスはあまり耳にしなかった。そこで、研究サイクルの最終年度には、技能面のアドバイスが自然と生まれるような掲示物を作成した（資料5）。

中学年の発達段階では、そもそも技能面に関するアドバイスをするのが難しく、的を射ていないアドバイスをする様子も見られたものの、進んでアドバイスをしようとする意欲自体は高まっていた。今後は、運動技能のポイントをより深く知る機会を充実させて、アドバイスをするための視点づくりを行っていく必要があるだろう。

(3) 自分とつながる

ア 子どもが主役となる学習活動の工夫

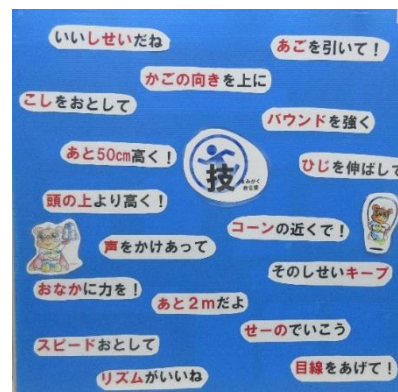
子どもが主役となる学習活動にするために、教師の関わり方について分析を進めた。高橋(2003)らの行ったフィードバックに関する研究を参考にして、発問や励まし、フィードバックの充実を図った。

発問をする際には、「今、困っていたことは何?」「何ができるようになった?」と、子ども自身の言葉で語らせたり、気付かせたりするようにした。そうすることで、友達と対話を重ねながら、自分たちの力で活動やルールを工夫する姿が増えていった。

また、小さな成長を認めたり、努力を励ましたりする機会の充実を図った。「ボール渡して、曲がるところに人を配置したのがよかったね。」「『大縄の内側からボールを投げる』というのは、他のチームもまねしていたね。いいアイデアだったね。」と、子どもたちの成長や頑張りを具体化・言語化して伝えたことで、子どもたちの振り返り欄に、自分の成長として記述されやすくなった。

力 試 し	ろく木	15秒	30秒	45秒
	ブランク	直線15秒	直線30秒	直線45秒
バ ラ ン ス	バランス ぼう	10秒	15秒	20秒
	回転 ジャンプ	半回転	4分の3回転	1回転

資料4 ワークシート（一部抜粋）



資料5 技能面のアドバイス

イ 学びの成果を実感し、次の学びにつなげることができる振り返り活動の充実

授業の終わりに、チームのメンバーとの対話を通して、振り返りを行う機会を確保した。友達という言葉によって、自分では気付いていなかった自身の成長やよさを発見している様子が見られた。単元を通して、対話型の振り返り活動に取り組むことで、子どもたちの表現力が高まっていった。

単元の終わりには、『『集え、スペシャリスト』の学習を通して、どんな力が身に付きましたか。』と子どもたちに尋ね、振り返り活動を行った。意見発表では、「腕の力」や「ジャンプ力」というような認知能力だけでなく、「(気持ちを) 切り替える力」や「みんなで準備する力」、「話し合う力」などの多様な成長を語る様子が見られた。今後の生活や学習に生かせそうな力を身に付けたという実感を得ているようだった。次の学びにつながる振り返り活動を行うことができた。

4 研究の成果と課題

(1) 教材とつながる

ア 成果

人数や使う用具などの条件を変えられる運動にしたり、構造的な単元計画で進めたりすることで、誰もが前向きな気持ちで活動に取り組み、みんなが同じ立場、同じ立ち位置で運動を楽しむことができた。

イ 課題

リレー競技の内容やルール設定によっては、運動技能の高まりを実感しにくい学習になる可能性がある。

(2) 仲間とつながる

ア 成果

自然に対話や温かな声掛けが行われるようなプログラムにしたことで、「友達と一緒に課題を解決することが楽しい」と思える機会が充実し、前向きな気持ちで運動に取り組もうとする成長志向の集団となった。

イ 課題

仲間同士の技能面のアドバイスの量は増えたが、質は思うように高まらなかった。アドバイスをさせるための視点づくりを行うなど、手立てが必要である。

(3) 自分とつながる

ア 成果

子どもたちの成長や頑張りを具体化・言語化して伝えたことで、子どもたちの振り返り欄に、自分の成長として記述されるようになった。

イ 課題

言語的なフィードバックだけでなく、非言語的なフィードバックの充実を図る必要がある。

〈参考文献〉

- ・ 「体育授業を観察評価する」高橋健夫（明和出版）
- ・ 「新版 体育科教育学入門」高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖（大修道書館）
- ・ 「小学校高学年の体づくり運動領域における知識及び運動の指導が児童の課題解決に与える効果の検討ー第5学年の持久走単元を対象としてー」宮尾夏姫・大友智・吉井健人・深田直宏・築田尚晃（体操研究第15巻）